帰国報告

デトロイト補習授業校

前デトロイト補習授業校　中高等部教頭
現　札幌市立伏見中学校　教諭　　藤田　憲一

１　はじめに

2005年４月から2008年３月までの３年間、在外教育施設派遣教員としてデトロイト補習授業校で勤務しました。同じ在外教育施設でも、日本人学校とは全く異なる「補習授業校」の存在を国内で知る人は少ないと思いますが、現在、日本人学校が世界49か国に86校設置されているのに対して、補習授業校の数は世界55か国に201校設置とはるかに上回っています。

補習授業校は、海外で生活している子どもたちにとって日本国内とほぼ同じ内容の教育を受けられる貴重な場というだけでなく、日本の学校の学習習慣・生活習慣など、日本の学校文化に触れる大切な場でもあります。しかしながら、補習授業校の運営には、海外ならではの課題や制限も数多くあります。そこには、子どもたちの笑顔のために日々努力し続ける教職員と、それを支えるために並々ならぬ努力を重ねる多くの関係者の姿があるのです。

２　ミシガン州について

アメリカ合衆国の北東部にあるミシガン州は、周囲を五大湖の内の四つの湖に囲まれた「Great Lakes State」として知られています。州全体が平坦な地形で山はほとんどありませんが、約11,000の湖沼が点在し、多くの河川が流れる緑豊かな土地です。

ミシガン州は北海道とほぼ同じ緯度に位置し、気候も大変よく似ています。夏は温度がかなり高くなることもありますが、比較的湿度は低く、過ごしやすいといえます。

冬は11月下旬～12月頃から雪が降り始めますが、降雪量はそれほど多くなく、降り積もった雪はほとんどの場合数日で解けてしまいます。北海道のように毎冬スタッドレスタイヤに履き替える必要はなく、オールシーズンタイヤで充分過ごせます。

冬場の最高気温は０℃を下回ることが多く、１月の平均気温で－４℃程度ですが、年に数回は－20℃を超える寒さに襲われます。ただし、ミシガンの住宅は大半が集中冷暖房を完備しているため、室内では年間を通して快適に過ごせます。

州都は南西部にあるランシングですが、最大の都市は南東部のカナダ国境に面したデトロイト市です。古くから自動車産業が発展したことで有名なこの街は、人口約８８万人、全米11位の大都市で、日本のニュースなどにもたびたび登場する自動車メーカー、ＧＭの本社ビルがあることでも知られています。しかし、1960年代に起こっ

た白人と黒人との摩擦による暴動を機に、裕福な白人層がデトロイト市内を逃れて郊外に移り住むようになってからは、街は廃墟化がすすみ、治安は著しく悪化しました。

現在は街の再生計画が進み、以前より治安も改善したといわれていますが、デトロイト市の凶悪犯罪発生率（殺人、強盗、強姦、暴行などの発生件数を人口 10 万人当たりに換算したもの）は、全米で毎年ワースト上位にランキングされ、その割合は東京と比較すると、約 30 ～40 倍とのことです。

このように、デトロイト市は危険な都市というイメージがあるのですが、一方で郊外の街は生活水準が高く、地域にもよるのですが治安も概して良好といえます。

ほとんどの日系企業や在留邦人は郊外に居住しており、デトロイト補習授業校があるのもデトロイト中心部から北東に約 30km、車で 30 分ほど北上したところにあるバーミンハム市になります。治安がよく、教育環境も非常に整ったところです。

現在、ミシガン州に進出している日系企業の数は事業所数で 410、うち自動車関連製造業が 40%近く（2006 年総領事館調査による）を占めています。在留邦人の数も１万人を超えており、日本人が多く住む街にはたくさんの日本食レストランや日本食材店が存在しています。

３　ミシガン州の教育事情

以下に述べる情報は、ミシガンの学校に子女を在籍させている日本人保護者のために作成された冊子、ミシガン教育案内「りんごの実るころ」から抜粋、参照させていただきました。

（１）教育制度・組織

アメリカでは、公立学校の運営は連邦政府の管轄ではなく、州政府と各地方自治体に委ねられます。ですから、教育事情は州や郡によって異なります。また、州政府は各地方自治体に対し援助、助言はしますが、実際の学校運営は各地方自治体の下に置かれた各学校区に委ねられているため、教育レベルや指導方針、カリキュラム、授業料など、学校区によっても異なります。財政の豊かな学校区の子どもたちは、一人当たりの教育費も多く、より恵まれた教育環境にあるといえます。

（２）学校区と学校概要

ミシガン州は 83 の郡に分かれていて、それぞれの群の中に１つまたは複数の学校区があります。公立の学校は小中高とも、普通、住所によって通学する学校が決められます。教育費の約 1/2 は学校区内の住民の税金で賄われるので、学校区内の住民の子弟のキンダーガーデンから 12 年生までの公教育は無料です。

日本の義務教育は小学校１年生から中学校３年生までの９年間ですが、アメリカの義務教育期間はそれぞれの州が学年ではなく年齢で定めており、ミシガン州ではキンダーガーデン（６歳）から始まります。

キンダーガーデンからハイスクールまで学年の区分については、学校区によって違いがあります。デトロイト周辺地域のほとんどの学校区では、キンダーガーデンから５年生までをエレメンタリースクール、６年生から８年生をミドルスクール、９年生から 12 年生をハイスクールとしています。

① 就学以前

・プリスクール／ナーサリー

子どもが２才～５才未満の場合に通います。これらは日本の幼稚園、保育園に相当するもので、子どもたちはキンダーガーデンに入る準備となるような、ある程度の教育と社会経験を得ます。週２日から５日の半日コース、全日コースなどのさまざまなコースがあり、その中から都合に合わせて選択できます。プリスクールのほとんどは私立で、保育料はコースによって異なります。

また、教会付属の幼稚園や協同保育の幼稚園もあります。教会付属の幼稚園は、教会員子女でなくても入園できます。協同保育の幼稚園では、経費節約と保護者の育児への理解を深めるために、保護者の教室内での手助けが要求されます。

・デイケア

デイケアとは、一種のベビーシッター機関で、時間単位で子どもを預けることができます。企業、学校、スポーツクラブなどの施設に付随していることもあります。ちなみに、アメリカでは子どもだけを家に残して外出することはできません。ミシガン州には、家に残しておいてはいけない子どもの年令基準を定めた法律はありませんが、一般的に、12才未満の子どもを家に残して外出する時にはベビーシッターをつけます。子どもだけにしておいた場合、子どもの安全を脅かしたとして、親の責任が問われることもあります。

ベビーシッターは、専門の人を雇うこともできますし、近所の高校生などにアルバイトを頼むこともできます。

② 初等教育

・幼稚園（キンダーガーデン）

ミシガン州の法律では、６才から 16 才までが義務教育ですが、ほとんど全ての子どもは、５才になると９月から公立学校に入ります。キンダーガーデンは、日本の幼稚園とは違い、公立学校の第１段階、最初の学年です。子どもは、通常、午前か午後のどちらか半日登校します。スクールバスにも無料で乗れます。

キンダーガーデンでは、子どもたちが学校に適応して、集団のなかでの協調性を身につけることを主目的とし、国語、算数、その他の科目の準備段階となるようなことを指導しています。

・小学校（エレメンタリースクール）

基本的には、年令別に学年が決められています。普通、１クラス 30 人以下です。

音楽、美術、体育などは、たいてい他の場所で学びますが、それ以外は同じ教室で担任の先生と過ごします。小学校では、国語、算数の基礎と、社会、理科、音楽、美術、体育などの初歩を学びます。小学校は、たいてい午前８時半頃から９時半頃に始まり、午後２時半頃から３時半頃に終わります。スクールバス利用区域内の生徒はスクールバスを利用し、そのほかの生徒は徒歩か保護者の送迎により登下校します。

③中等教育

・中学校（ミドルスクール）

・高校（ハイスクール）

この段階になると、授業は必修科目と選択科目からなり、科目ごとに教師と教室が変わります。そのため、毎時間同じクラスメートと一緒にホームルームにいるということはありません。

中学校、高校で学ぶコースは、生徒自身がカウンセラーの助言をもとに決定します。中学校、高校ではカウンセラーは重要な位置を占めています。生徒は、カウンセラーに個人的な問題や進路、就職、大学進学などに関するアドバイスを受けることもできますし、社会的問題を抱えている場合には専門機関を紹介してもらうこともできます。生徒のほとんどはスクールバスで登下校しますが、ミシガン州では 16 才になると自動車免許が取得できることから、自分の自動車で通学できる学校もあります。

（３）さまざまな教育

アメリカでは、人間はそれぞれの特性や要求す

るものが同じではなく、その違いは大切にされるべきだと考えられ、一人一人の子どもの能力と資質にあった指導が行われています。

①バイリンガル教育と ESL 教育

ミシガン州には ESL やバイリンガル教育の実施について州政府の指針がなく、それぞれの学校区にすべてが任されています。従って、各学校区が実施するかどうかを判断し、実施の場合は独自の方法で行っています。そのため、体制や指導方法・内容も学校区によって異なります。バイリンガル教育と ESL 教育は基本的には次のように分かれていますが、学校区によっては予算の関係などで区別が明確でないところもあります。

・バイリンガル教育

教科の学習を、児童生徒の母語を通して援助・援助するプログラムをバイリンガル教育と呼びます。正規の授業から生徒を適宜に連れ出して教える方法や、バイリンガル教師あるいは助手がクラスに一緒に出席して手伝う方法があります。

・ESL 教育

ESL とは、English As a Second Language の略で、英語を母語としない児童生徒に英語で英語を教えます。専任の ESL 教師が常駐し、専用の教室を用意している学校区もありますし、学校区全体を担当する ESL 教師が必要に応じて各学校を巡回して授業をする学校区や、ESL クラスのある学校へ生徒をスクールバスで送迎して授業を受けさせる学校区もあります。

②才能教育

特別に秀でた才能をもつ生徒のための教育です。数学、国語、科学、音楽、運動など、さまざまな分野でその才能を伸ばすための特別な指導が行われています。

③特殊教育（スペシャルエデュケーション）

広義には前述のバイリンガル教育、ESL 教育や才能教育も含まれますが、一般的には教科の遅れを取り戻すための教育をスペシャルエデュケーションと称しています。

対象は、身体的障害のある生徒、情緒的障害のある生徒、（英語を母語としない）英語力の不足した生徒、知能に問題のある生徒、学習能力の不足している生徒などです。

④補習教育

国語、算数、社会、理科などの基礎学力の不足を補う教育です。授業時間内に適宜に連れ出して教えます。対象は、基礎学力の習得が十分にできていないキンダーガーデンから 9 年生までの生徒です。補習教育のための資金は国から支給されます。

⑤習熟度別グループ指導

多くの小学校では、学級内の生徒を習熟度に応じていくつかのグループに分け、指導しています。また、中学校、高校でも普通クラスのほかに、内容を易しくしたクラスや高レベルのクラスを設置して、科目ごとに習熟度別学級編成を実施しています。

（4）「規則」について

アメリカでは、子どもの社会性や道徳の教育は家庭で行なうべきものという概念が強いといわれています。そのため、学校の「規則」というのは、各家庭内で行なわれる秩序教育の延長として考えられており、人に迷惑をかけないこと、礼儀正しく振る舞うこと、時間を守ること、公共物を大切にすること、先生や職員の指示に従うことなどが、基本的なものとしてあげられます。

各学校では、学習や生活の上で細部にわたったきまりを示す「ハンドブック」を発行しています。ここには、心得的な事項ではなく、罰則や処分に直接結びつく規定が細かく記されているのです。これはアメリカの生活指導目標が自主性の伸長と個性の尊重にあり、規定はあくまで個人の責任を前提としているからです。ただし、日本の「校

則」のように校外生活に及ぶ規定とは異なり、校内生活の範囲でのみ規定を設けている学校が多くなっています。

具体的な規則の内容を見ていくと、「先生の発言に注意を向ける」「授業開始前に文房具を用意しておく」など、日本の学校ではわざわざ校則に明記されることのないものも明示されていることがあります。逆に考えると、アメリカの学校の場合、これらの規則に反すると罰則・処罰の対象となるのです。

日本の公立中学校・高校の場合、制服がある学校が大多数で、服装に関するきまりも細かなことが多いと思います。しかし、アメリカの学校では、服装やおしゃれは個人的なことであり、個性を育てるという観点からも学校の関与すべきことではないと考えられています。その責任は生徒自身や保護者の意思に任されるべきことであり、そのため、一部の私立学校等を除けば、公立学校に制服はなく、服装は原則的には自由です。実際に、多くの生徒（教師も）がジーンズなどの動きやすい服装で登校しています。アクセサリーや化粧を禁止していないのも、日本の学校と大きく異なる点です。

ただし、教育環境にふさわしくない服装は自粛すべきとして、酒・たばこ・麻薬・Sex・暴力などを扱ったデザインのもの、おなかが見えるような短いシャツや肩ひものないシャツ、肌がすけるような服などを禁止したドレスコードを示している学校も多くあります。

また、言葉遣いに関する規則は多くの学校で規定されています。個人の尊重が重んじられるアメリカですが、子どものしつけに対しては、ある意味日本より厳しい傾向があります。他人に対して暴言を吐いたり、使ってはいけない汚い言葉で相手をののしったりする行為は、家庭で幼い頃から厳しく注意されるのです。（しかし、近年アメリカでも家庭教育の質の低下が懸念されているようです。）当然、学校でもその延長として、教師に対する話し方、生徒同士の言葉遣いについての規定があります。

さて、これらの規則に違反した場合の処置ですが、学校ごとに、あるいは違反の内容や回数によって違いはあるものの、一般的には日本より厳しい対応といってよいと思います。叱責や保護者への連絡、保護者の召喚といった日本にもあるもの以外に、以下のような処置例があります。

①居残り（Detention）
一般的には放課後残されて課題や奉仕活動をする。
②学校内停学（In-School Suspension）
登校は許可されるが授業には参加できず、別室にて監督の教師のもとで勉強する。
③停学（Suspension）
１日から数日間の登校禁止を命じられる。

実際にこれらの処罰を適用する基準は、学校によって、また一人ひとりの教師によっても違いがあるようですが、多くの学校では「２回注意を受けると居残り」というように具体的に定められています。事情の如何に関わらず、直ちに懲戒の対象となるケースや、公立学校でありながら退学処分を科すこともあり、教師への暴力はそれに当たります。アルコールの所持・使用に関しても、多くは学校内で処理する日本とは異なり、迅速に警察への連絡が行なわれるのが通常です。

このような日本の学校との違いは大変興味深く、見習うべき点もあるとは思うのですが、アメリカの場合、社会全体として守るべきことと子どもや保護者の意思に任されてよいことが明確に区別されていて、学校の規則が家庭や地域の理解を十分に得ていることも見逃してはなりません。

社会における学校の役割についても、アメリカと日本では認識が全く異なっているので、そう簡単に取り入れられるものではないようにも感じます。

４　デトロイト補習授業校について

（１）名称・所在地

日本名　デトロイトりんご会補習授業校

英文名　DETROIT RINGOKAI
JAPANESE SCHOOL OF DETROIT

（２）概要

デトロイト補習授業校は、1973 年にミシガン州在住の日本人駐在員の方々が集まり、子ども達のために、日本語による日本の教育課程を補習する機会を与えることを目的として自主的に創立された学校です。

現在は、非営利団体である「デトロイトりんご会」が設置する私立の補習授業校となっていますが、その建学の精神は今も変わらず、日系各企業のご支援、園児・児童生徒の保護者の方々の力強いボランティアによって運営されています。

「補習授業校」とは、平日は現地校やインターナショナルスクール等に通学している日本人の子どもに対し、土曜日や放課後等を利用して国内の小学校又は中学校の一部の教科について日本語で授業を行う教育施設のことをいいます。

デトロイト補習授業校の場合、年間 42 日間の土曜日を授業日にあて、現地校の校舎を借用して、限られた時間数でのカリキュラムを組んで授業を行っています。

設置課程は、小学部・中学部のほかに、高等部（1991 年度開設）、幼稚園部（1997 年度開設）があり、在籍数は月による変動が大きいものの、幼稚園部 100 名前後、小学部 650 名前後、中学部 150 名前後、高等部 40 名前後で、年間を通して 900 名以上が在籍しています。ほとんどがミシガン州内からの通学ですが、隣接するカナダからの通学者や、州北部から４時間以上かけて通学している家庭もあります。在籍のおよそ９割が、数年後の帰国を前提にしている家庭です。

授業は日本の教科書を使って行いますが、日本人学校との大きな違いは、教える先生はほとんどが現地で採用された講師であるという点です。常勤講師数は約 70 名、事務局は教務４名と９名の事務職員で構成されます。

平日の火～金は、現地のシーホーム・ハイスクールに常設された事務局でスタッフが土曜日に向けて平常業務を行っています。授業は、幼稚園部から小学３年生までが、土曜日のみ現地のウエストメイプル・エレメンタリースクールを借りて行います。小学４年生から高等部までは、シーホーム・ハイスクールの教室を借りており、現在２校体制で授業を実施しています。専用の事務局、職員室、倉庫、図書室などを備えるデトロイト補習授業校は、他の補習授業校に比べて恵まれた環境にあるといえるでしょう。

補習授業校の場合、日本から派遣される教員数の決定は義務教育相当の児童・生徒数によります。デトロイト補習授業校は大規模校であるため、派遣教員も３名体制で、それぞれ校長・シーホーム校小学部教頭・中高等部教頭を担当し、他に現地採用のウエストメイプル校教頭兼カウンセラーが１名、あわせて４名が教務として学校運営・講師の指導等の業務に当たっています。

日本で「土曜日しか授業がない」というと、よく「平日は何をしているのか」と尋ねられますが、上記のように常勤講師も土曜日しか出勤せず、できるだけ授業に専念してもらうため、行事の企画・運営、カリキュラム・時間割の作成、校内研

修体制の立案・準備など、日本の学校にある校務分掌のほとんどを事務局もしくは教務で担当することになるわけです。事務局スタッフの平日業務は多忙を極めます。

学年は、日本の学校に準じて４月１日から翌年３月 31 日までです。前後期制を採用し、各期末には通知票も発行しています。学級編制は各学級 25 人以下と小人数です。

各学部の課程を修了したと校長が認定した者には、卒業式において卒園証書・卒業証書が交付されますが、日本の学校教育法等に基づく学校ではないため、在学・進級・卒業しても日本における法的な効力はありません。

（３）各学部について

①幼稚園部

補習授業校の設置目的にそって、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の領域を総合的に扱う幼稚園生活を通して、講師・友達・保護者などとふれあいながら、子どもたちの生きる力の基礎を育てるための補助的な機会を与えます。

幼児期に必要な日本語への興味、関心を育て、言葉で表現する力を養うとともに、日本の遊び、行事を体験させ、日本の文化に触れ、豊かな感性を養っていきます。また、施設・設備の都合上、幼稚園部は定員制をとっています。

②小学部・中学部

日本語（国語）の習得・保持・発達を図るため、国語・算数（数学）を中心とした教科の補習（学習指導）を行います。指導教科、１日あたりの授業数は以下のとおりです。

【小学部】

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
国語	3	3	3	3	3	3
数学	2	2	2	2	2	2
社会				1	1	1
総合	1	1	1			

小学部１～３年の「総合」の時間は、日本でいう「総合的な学習の時間」とは異なり、音楽など他の教科・道徳・特別活動の内容の一部を学習します。小学部４～６年では、それらの内容を国語・算数・社会の時間を利用して学習しています。

【中学部】

	１年	２年	３年
国語	2	2	2
数学	2	2	2
社会	1	1	1
理科	1	1	1
学級の時間	1	1	1

小学部・中学部とも、教科書は日本から無償で配付されます。

③高等部

小中学部の教育方針に準じた指導に加え、選択教科を取り入れたカリキュラムの実施により、個々の進路に応じた指導を行います。

入学者の選抜にあたっては、入学希望者に対し小論文と面談を課し、その結果で入学許可の判定を行います。 修了・卒業認定は取得単位で決定し、卒業に必要な単位数は必修 11 単位、選択７単位の 18 単位としています。

開設している教科は、現代文・国語表現・数学Ⅰなどの必修教科に加え、理科Ⅰ、数学Ⅱ・Ⅲ、日本史・英語など多岐にわたり、できる限り生徒のニーズに合わせています。

（４）年間の主な行事

デトロイト補習授業校では、年間 42 日という少ない授業日数であるにもかかわらず、日本の学校文化を体験させるために、ほぼ日本と変わらないくらい多くの行事を取り入れています。

これらの行事は、学校を運営する運営委員会や父母会を中心とした保護者の全面的なバックアップにより成り立っています。

４月　入園式・入学式
５月　授業参観・学級懇談会
　　避難訓練（トルネードを想定）
６月　大運動会（全学部が参加）

９月　避難訓練（火災を想定）
１０月　小学部音楽会・高等部宿泊活動
　　オープンハウス
　　※現地校の先生方を招待し、授業を参観していただくことで、日本の学校文化や子ども達への理解を深め、現地校での指導に役立てていただきます。
１１月　授業参観
１２月　中学部自主活動
３月　卒園式・卒業式

（５）補習授業校が抱える課題

海外において、日本からの派遣教員も数名しかなく、しかも借用校という状況で日本と同様の教育活動を行うのは、予想以上に困難が伴います。そんな中でデトロイト補習授業校は、施設面でも組織・運営面でも大変整備されており、他の補習授業校に比べると大変充実した環境にあるといえます。それでも他校と同様、なかなか改善できない課題や問題点が多くあります。

まず、他の補習授業校と同様、借用校としての制限があることです。当然、教室を始め、体育館等の使用にはお金がかかり、使用時間にも制限があります。理科室が借用できないため、特に理科の授業では実験ができないものが多くあります。教室には現地校のものが多くあるため、破損・紛失等のトラブルには特に気を使います。

また、慢性的な講師の不足も大きな悩みです。帰国・転勤等の理由で講師が突然退職するというのもよくあることで、非常勤の講師登録者も 20 名ほどいるのですが、常勤で働ける人となると簡単には見つかりません。

さらに、現地採用の講師は、ほとんどが教員免許・教員経験をもっていません。講師への指導・助言、教材教具の整備や作成とともに、効果的な研修の推進を図るのも派遣教員としての重要な役割です。しかし、学校運営を中心とした派遣教員の業務多忙に加え、講師の勤務時間の制限（土曜日のみの勤務、残業手当て等）の問題や幅広い学部・教科への対応の難しさから、十分なことができないのが現状です。それでも、公開授業、日本人学校への講師研修派遣、学部別研修会・全校研修会の実施など、今まで積み上げられてきた研修に加え、現在は教科定例会の実施や内定者研修・新任者研修の見直しなど、一層の充実が図られています。

５　おわりに

３年間の派遣教員としての補習授業校勤務は忙しくもたいへん有意義なものでした。とりわけ学校運営・学部運営に携わったことは貴重な経験となりました。

また、補習授業校の授業研究における「本当に必要なことは何か」「限られた時間でいかにして学力を身につけさせるか」という視点は、帰国後の実践にも大いに役立つものと思います。

子ども達の笑顔のために、保護者と教師が一体となって創りあげる補習授業校のあり方は、理想の教育体制ともいえます。すばらしい経験をさせていただいたことに対し、関係各位にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。